

番号	議題	質問・意見	当日の回答・対応等
1	議題1	飛騨圏域は面積が広く、高齢化も進んでおり他の地域へ搬送することは容易ではないため、圏域内に1つは拠点病院を確保すべきだと考える。高山市赤十字病院と久美愛厚生病院は設立母体が異なるが、人材も限られているためまとめていく必要があるのではないか。	
2		下呂市の金山地区は中濃圏域の方が近く、特に冬場は高山へ行くことは困難である。飛騨市の一部も富山の方が近く、区域を見直すべきではないか。	
3		構想区域について、金山地区は飛騨圏域から抜けたほうがいいのかという意見があったが、市町村を分けて考えることは可能なのか。実際の患者の動向を考えると、区域と合致しないところもある。 急性期拠点に関しては、やはりこの飛騨圏域で一つ、どうしても必要と考える。	
4		資料にある患者受療状況では、岐阜県と愛知県が出てくるが、愛知県を跨いで構想区域を作ることを考えているのか。	圏域や都道府県を跨ぐケースも想定されている中で、患者の必要病床数や患者の流入状況も踏まえた上で、ガイドラインが出てから改めて協議し、検討して参りたいと考えている。 (事務局)
5		人口の考え方について、単に定住している人口だけでなく、昼間人口や夜間人口という要素も考えながら医療体制を構築していく必要があるのではないか。	
6		構想区域と二次医療圏、従来の拠点病院という考え方を再整理して、市民本位の医療提供体制を議論すべきである。	
7		人口約10万人の飛騨圏域に急性期拠点病院があるかということについて、飛騨は移動に時間がかかりアクセスの制限があるため、ある程度は地域の中で対応できる機能を育てていく必要があるのではないか。	
8		区域について、アクセスの面を考慮し、中濃圏域や富山県といったような近隣と柔軟に連携し、地域だけにこだわらず必要に応じて隣接圏域の調整会議にも参加していくことも考えた方がよい。	
9		急性期拠点病院を1つ確保していく中で、経営母体が異なる2つの病院がどのように手を結ぶかというところには非常に大きな議論が必要であるため、県にもいろいろなアドバイスや支援をいただきたい。	
10		飛騨圏域はほとんど公立公的病院であるが、他圏域では私的病院が多くあり、調整会議で今後の医療を議論していく上で、私的財産権を奪われる可能性がある方が意見を言えない現状は間違っている。 県病院協会では機構改革を進めており、来年度、中濃や飛騨で設置された協議会に相当するような協議の場を提供して、調整会議等にも貢献できるようにしていきたいと考えている。	

番号	議題	質問・意見	当日の回答・対応等
11		名古屋大学と岐阜大学は同じ東海大学機構であるため、設立母体を越えて飛騨のための医療を話し合っていくべきではないか。	
12		飛騨圏域は非常に面積が広いので、他の圏域と一緒にした場合にアクセスがさらに大変になることを踏まえて今後の方針を考えていただきたい。	
13		病院の機能を考える上で、各医療機関がどこまでできるのか、どこまで診て次のところへ移るのかを情報共有することで、患者がどこの病院へいけばよいかわかるようにしていくべきではないか。	
14		飛騨圏域が置き去りにされないよう飛騨圏域を確立してほしい。急性期拠点を高山市に置き、高齢者に受け入れる病院と機能分担する形が望ましい。 東海環状開通でアクセスがよくなっているので岐阜大学の人的支援を強化してほしい。 県総合医療センターは県民全体のための病院として飛騨圏域の医療を支援してほしい。	
15		看護職が不足している中で、個々の生活状況によって急性期から慢性期へ、慢性期から急性期へ、のように働くスタイルを変えていけるようになると、人材が外に流出することを防げるのではないか。	
16		高山を中心とする医療体制は理解できるが、集約により下呂や神岡など各地域の活力が失われてしまわないような配慮が必要である。	
17		飛騨圏域は広く交通事情も悪く、冬はさらに移動が大変になるため、人口規模だけでなく地域ごとの特性に応じた検討が必要である。	
18		飛騨圏域では、高山赤十字病院と久美愛厚生病院の2つの病院で急性期から慢性期までを担っていただかないといけないと考えている。 下呂金山のように距離があるところもサテライトのような形で機能していただきたい。	
19		飛騨圏域では人口減少と高齢化が進み、基礎疾患を持つ高齢者が多いため、高齢者救急や急性期医療が必要であるが、同時に慢性期も不可欠であり、今後は慢性期の話も進めてほしい。	
20	アドバイザー	大学病院は医師を派遣する機能があるということで、今回大型の予算がつき、いろいろな医師派遣機能を含めた人的支援をする組織づくりの構想を練っているところである。また、岐阜大学と名古屋大学で様々な連携についての議論も始まったところである。地域枠学生の卒業生という概念でも、学生がそこで働ける環境整備を現場の方々や行政の方と協力しながら取り組んでいきたいと考えている。	
21	アドバイザー	飛騨圏域で急性期拠点病院を維持していくためには、高山赤十字病院と久美愛厚生病院だけでなく、他の病院や自治体、医師会等のサポートも必要になると考えられる。どのように地域の医療を守っていくのか、介護や在宅を含めて議論していく必要がある。この地域の知恵と工夫で乗り切っていかなければならない時代であるため、今後も地域の患者を守っていくようにお願いしたい。	